

# 手と手をつないで

No.371

山口 裕之

(マザー・アース人権啓発研究所主宰)



## 障がい者の人権について 考える その2

### 視力を失って生きる

私の友人、田里友之さんのことを紹介します。田里さんは今年41歳。沖縄県石垣島で生まれ育ちましたが、目の病気をわずらい小学校6年生で完全に視力を失いました。学校の友だちや先生とはいい思い出があまりなかったそうです。その後、キリスト教会の牧師さんのご尽力により高校卒業とともに九州で唯一の国立福岡視力障がいセンター（福岡市西区今津）に入学させてもらいました。

ここで、3年間基本的な生活力を付けるとともにあんまマッサージ、針、指圧の資格をとり、福岡市の県営住宅での一人暮らしが始まりました。その後は不況のため収入を得る仕事につけず、障害基礎年金で生活しました。そのあいだも点字図書館、教会、対面朗読などで課題をもって学び、人との出会いを作ってきました。

### 田里さんと出会う

私は14年前にある学習会で田里さんと出会い、生活面の相談をきいたり、オカリナ演奏を教えたりするようにな

りました。聴覚を最大限活用し、楽譜なしにすべて暗譜する田里さんは目覚ましい上達を遂げました。

私は長らく福岡市で小学校の教諭をしていたので、学校現場で子どもたちが田里さんとじっくり出会う学習をプロデュースしてきました。



### 学校で田里さんと出会い、学ぶ

田里さんはゲストティーチャーとしてさまざまな学校に訪問しました。依頼のあった学年の教室でひとクラスにまる1日ずつ滞在し、ともに学校生活を送るといいます。朝の1時間は私がインタビューする形で上記の内容を受けとめてもらい出会いを作りました。その後は担任の先生はほとんど関与せずに学校生活を送り、子どもたちがトイレに案内したり、給食を進めたり、一緒に移動して遊んだりしました。

子どもたちは田里さんの学ぶ意欲や記憶力の高さに感動し、今の自分の姿勢と重ねました。また、目が見えないことに対して、必要な支援は何かを体験的に学び、偏見やおせっかきの考えがなくなっていました。

そして、41歳になっても田里さんがさまざまな立場の人々と出合いを作り、共に手をつないで人権向上をみつめていることや自分の特技や持ち味を生かして自分や周囲の人々のよりよい生活を作ろうとしていることを学びました。田里さんが口にされた「不自由なところはあってもかわいそうな存在じゃない」という言葉を受けとめて、さらなる障がい者の人権についての学びを深めていきました。

### 私たち一人ひとりが心の「バリア」を取る

私たちが住んでいる太宰府市においても、障がいのある方がいらっしやいます。田里さんと小学生の出会いのように、さまざまな場で障がいのある方に学んでいくことが大切だと思えます。そして、心の「バリア」を取り除き、お互いを尊重して共に歩み、いっしょに楽しく幸せに暮らす地域社会をつくっていききたいものです。